単位制の有効性をめぐって

人文学部　齋　藤　陽　一

大学における単位制度では、例えば、講義の場合、週１回２時間の授業に対して、その倍、時間外学修をすることが本来求められている。しかしながら、こうした制度が、学生の学習効果を考えた場合に、必ずしも有効でないことがある。人文学部を例にとれば、いわゆる概説的な講義の場合（例えば、ロシア文学を研究する学生にとってのロシア文学史の講義）、こうした単位の考え方は有効であろうが、特殊研究のような講義の場合（例えば、ロシア文学の個別の作家についての講義）、むしろ講義の時間では研究方法を学び、家庭で自分の研究する作家について学習をする方が学習効果が上がるだろう。その講義が、聴講する大多数の学生にとって緊急に必要な知識を与えるものでない場合は、必ずしも現行の単位制度が最適であるとは言えない。人文科学のように研究領域が細分化している場合、ということは学生の履修コースも細分化している場合だが、単位制の考え方は必ずしも有効ではないのではなかろうか。

また、実習等については別の意味で問題がある。ワークショップでは、自分自身の担当科目として２年生向けの「コミュニケーション論実習」の取り組みを紹介した。平成９年度のこの実習では、文化的な活動において、ジャンルを成立させているものは何かということを、実際に創作することで実感するということを行った。当日は、そのうち曲作りの課題について紹介したが、同じ詩を使って、例えばフォークソングと演歌を作るとしたらどこが異なってくるだろうか、という課題に学生は取り組んだ。この場合、当然授業の時間内には作品は完成しない。授業時間外の取り組みが必要となる。

課題は曲作り以外にもいくつか用意されていて、担当者が１人に集中しないように配慮はした。が、そのうち演劇の課題を、学生の中心になって担った学生からは、やはり、負担が大きいためか、不満ともとれる言葉も飛び出した。冗談めかしてではあったが「これで２単位なのか？」と。脚本の手直しに相当時間がかかったのである。語学の授業も含めて、現行の制度では授業時間のみで終わることを前提として、単位数が低く抑えられているものでも、そこでの学習をより実りのあるものにしようとすると、授業の延長が必要であったり、授業外の活動が必要であるものもある。講義の場合の単位の考え方を再考するとともに、実習・実験系、語学系の単位についても考える余地はあるであろう。